



〈4・27進路講演会〉「希望進路実現に向けて、保護者としてどう向き合うか」



講演中の張 乙清氏

4月27日(土)は10連休の初日であり、また前日の夜に降った雨のため駐車場にも不安の残る状況ではありましたが、幸い校庭に駐車場が確保でき、午前中の各PTA行事にも数多くの保護者の方にご出席いただくことができました。昼食を挟んで午後1時30分より進路講演会を開催しましたが、この会にも多くの保護者の皆さんに足を運んでいただきました。

今年度は株式会社ベネッセコーポレーションより東日本教育支援推進部の張 乙清(ちょう いっせい)氏を講師に迎え、「希望進路実現に向けて、保護者としてどう向き合うか」をテーマにご講演いただきました。桐蔭学園高校出身の張氏は高校時代の野球部でのエピソードを交えながら、現在の入試状況から新しい入試制度において求められること、受験生に必要な学習への姿勢やそれを見守る保護者の在り方など、幅広い話題についてわかりやすく語っていただきました。500回を超える講演経験をお持ちということで、その軽妙洒脱な話しぶりに、80分という講演時間がとても短く感じられるほどでした。講演の中で、張氏がおっしゃっていた「**現在、大学は行こうと思えば誰でもいくことができる。でもだからこそ、「なぜ大学に行くのか」というその目的を、自分できちんと考えなければダメだ**」という言葉は、是非生徒にも伝えたいと思います。参加された保護者の皆様はどのような感想をお持ちでしょうか。もし今回の講演で何かしらのヒントを得られましたら、お子様との会話の中でお話しいただければと思います。

〈5・17 進路講演会(スタサポ結果報告会)から〉

5月17日(金)に視聴覚室にて、6校時に第2学年生徒に対して、7校時には第3学年生徒に対して、進路講演会としてスタディサポートの結果報告会を行いました。

当日は株式会社ベネッセコーポレーション・東日本教育支援推進部・首都圏エリアで課長をされている森 大輔氏をお迎えして、3月に行ったスタディサポートの結果を分析するとともに、各学年の生徒に対し、これからの学習に対する望むべき姿が語られました。講演の中で森氏は「自主性と主体性の違い」について話されました。「**自主性とはあらかじめ明確に定められたことを、他人に言われる前に自ら進んで行うことであり、主体性とは何をすることが決まっていなくても、自らの判断と責任で行動できること**」だと説明されました。これからの入試でも求められていく力はまさに「**主体性**」です。スタサポの結果から、何を考え、どう行動するか、ぜひ主体的に行動することで、学力の向上を図ってほしいと思います。時間は45分と限られたものでしたが、**各自が自らの立ち位置を改めて見つめ、これからの展望を抱いたこと**と思います。

6月の進路関係行事

- 1(土) 進研マーク模試③
駿台模試①②③
- 7(金) 大学出張講義③
- 14(金) キャリア教育①
- 18(火) 緑陽祭(体育祭)
- 21(金) 第55回緑陽祭
[~22(土)]
- 24(月) 緑陽祭代休
- 28(金) 金融庁職員による出張講座③
スタサポ結果報告会①

7月の進路関係行事

- 2(火) 第2回定期試験
[~5(金)]
- 3(水) 志望校検討会
[~4(木)]
- 12(金) 進研記述模試③
- 13(土) 進研記述模試①②③
- 14(日) 学校説明会
- 15(月) 小論文課外③
- 18(木) 全統マーク模試③
[・20(土)]
- 20(土) 保護者会③
- 23(火) 三者懇談期間①②③
[~8/5(月)]
- 26(金) 終業式、大掃除

※○数字は学年を示します

<進路を考えるヒント>

NO IMAGE

左は「京大変人講座」を開講し、「フラクタル日除け」などのユニークな発明で知られる「もっとも京大らしい」京大教授の酒井 敏（さかい さとし）氏が4月に上梓した「京大的アホがなぜ必要か～カオスな世界の生存戦略」（集英社新書）という本です。帯には「ムダと変人が世界を変える！」とあり、大変興味をそそられたため、5月の連休中の読書に…と手に取りました。キャッチーなタイトルとは裏腹に、内容はカオス理論やスケールフリーネットワークといった最先端理論をヒントにしながら、現代社会における「学術の危機」に警鐘を鳴らし、現在進行中の大学改革に対する痛烈な批判の書となっています。1980年代に大学は「レジャーランド」と揶揄されたこともあり、社会から「役に立つこと」をきちんとやるよう求められるようになり、1991年の大学設置基準の大綱化政策（いわゆる規制緩和の一つ）が実

施されたことに端を発し、各大学が「何の役に立つかわかりにくい教養部」を次々と解体していきました。その後、世間で競争原理に基づく効率化が叫ばれると、国立大学も法人化され、「選択と集中」のかけ声の下、大学から「無駄」を無くす動きがどんどん加速して行きました。しかし、酒井氏は「そうした改革の結果、日本の学術全体がかつての勢いを失い、論文数の世界シェアも急降下してしまった」と指摘します。では何がいけなかったのか？一つには何か新しいものを生み出す（イノベーション）というのは、「アホ」が行う幾多の「ムダ」からしか生まれられないにもかかわらず、その「アホ」や「ムダ」を「効率」と引き替えに排除してしまったことです。既成概念を覆すようなブレイクスルーというのは、もちろんその前段階として地道な基礎研究などがあってのことですが、実現するときは、今まで誰もやったことがない（＝アホ）、一見すると意味のないこと（＝ムダ）が引き金となって引き起こされるものです。学術停滞の二つ目の原因としては、「選択と集中」では社会の複雑化に対応できないということです。テクノロジーの進歩とともに社会が複雑になればなるほど、ほんの少しの変化が結果を大きく左右する（バタフライ効果）ことになり、予測のつかない事態に陥りやすくなります。そうした世界で、生き物が生き残るために大切なことは「多様性」です。大勢が選んだ道がもしダメになっても、「飽きるからこっちの道に行ってみようかな」という人（アホ）がいて、その人が選んだ遠回りの道（ムダ）があれば、私たちは絶滅することなく複雑な世界を生き抜くことができます。でも「選択と集中」では、こうはいきません。酸素を作り出すシアノバクテリアが現れた時、酸素は生物にとって「毒」でしたが、こうして現代まで生物が生き残れたのも、酸素を利用して生きる道を作り出したものの存在があったからこそです。Appleの創業者スティーブ・ジョブズは、生前、スタンフォード大の卒業式に招かれ、そこで後に伝説と言われるスピーチを行いました。そのスピーチの中で、彼は大学を落第したのち、偶然選択したカリグラフィー（西洋書道）の授業に夢中となり、そのことが契機となり、後にフォントの美しい革新的なMacintoshというコンピュータが生み出されたと述べました。コンピュータにとって、一見すると全く関係のないカリグラフィーがブレイクスルーを生み出したわけです。そして彼はスピーチの締めくくりにこう言いました。**"Stay hungry. Stay Foolish."**（ハングリーであれ。愚かであれ。）京都大学的に言えば、まさに「アホ」であることが大切なんだということですね。こんな話を聞いたら、「なんで数学を勉強する必要あるの？」とか「受験に必要なからこの科目は捨てる」とかいう人は、如何に自分の可能性を損なっているかを思い知るのではないのでしょうか？それは京大的「アホ」ではなく、ただ愚かなだけになってしまうから、気をつけましょう。